

弁士の語り 往時の熱気

3 映画



決闘の助太刀へ、街を駆け抜ける一人の侍。「橋もひと飛びに、江戸城越えて……」

スクリーン横の演台で、活動弁士、井上陽一さん(78)＝高砂市＝の語りが熱を帯びる。音声やセリフの入らないサイレント(無声)映画。弁士の出演はナレーションにとどまらない。声色を変え、老若男女、すべての登場人物を演じ分ける。

昨年12月、尼崎市のホールであった「血煙高田の馬場」(1937年)と「チヤップリンの寶屋」(16年)の上映会。映画の幕が下りると、会場は井上さんへの拍手に包まれた。

日本に初めて「映画」が

やってきたのは1896(明治29)年とされる。エジソンが発明した世界初の映写機「キネトスコープ」が神戸港から上陸した。映画の草創期は、サイレントの時代だった。作品の出来は、活動弁士の腕次第ともいわれた。

時を同じくして、国内では「五・一五事件」が起き、大義毅首相が軍の青年将校に暗殺された。街は次第に戦争の影が濃くなっていく。

全国でも数少ない現役の活動弁士、井上さんはチャップリン来日の6年後、姫路市で生まれた。映画との出会いは戦後、空襲の焼け跡に建ったバラック小屋でだった。中学を卒業すると、「好きな映画を無料で見られる」と映写技師の道に進んだ。時代はすでに、音声のあ

るトーキー映画が主流になっていた。初めて活動弁士を見たのは30歳くらいとき。優雅な語り口調で、客席をどっと湧かせる。その技に魅せられた。弟子入りし、79(昭和54)年にデビュー。全国を巡った。

「お客さんの顔が見えるのが活動弁士の醍醐味」と井上さんは言う。尼崎での上映後、観客はすぐには帰らず、井上さんを囲んで映画談議の輪ができた。井上さんと長年コンビを組み、各地で上映会を企画してきた映画プロデューサーの鶴久森典妙さん(88)＝西宮市＝は昨年、ドキュメンタリー映画「最後の活動弁士 井上陽一の世界」をつくった。



●昭和初期の新聞地。劇場や映画館が並び、グリコの大看板が上がる神戸市文書館提供(レファト)写真コレクション
●1932年5月、来日し、神戸港の船上で花束を掲げて歓喜にこたえるチャールズ・チャップリン。右隣は兄のシドニー

7、18日、神戸市中央区の元町映画館(078・366・2636)で公開する。初日、井上さんが弁士を務め「血煙り荒神山」(29年)も上映する。鶴久森さんは言う。「神戸に映画が上陸してから120年。井上さんの語りには、当時の人々を魅了した映画の原点があるんです」

(山崎輝史)



上映中の井上陽一さん。事前に置いたラジカセも自ら操作する＝尼崎市西武庫之荘3丁目

「映画の日」の起源は

神戸港にやってきた世界初の映写機「キネトスコープ」は、箱の中でフィルムを回転させ、のぞき込んで鑑賞する仕組みだった。

当時、神戸・花隈にあった社交場「神港倶楽部」で一般公開され、興行最終日にあたる12月1日が、日本映画連合会(現・日本映画製作者連盟)に



キネトスコープの複製品＝神戸市東区六甲オールドビルミュージアム

よって「映画の日」に定められた。六甲オールドビルミュージアム(神戸市東区)にはキネトスコープの複製品が展示されている。

現在のよつばにスクリーンに投影する映写機「シネマトグラフ」は仏・リュミエール兄弟が発明した。国内では1897(明治30)年、京都で初めて試写実験に成功し、大阪で初の公開興行があった、という記録もある。